

キャンペーン・ボランティア

ダウンタウンの民主党サポーターオフィスのマネージャーによると、私の滞在する街アプルトンは、まだ勝負がついていないバトルフィールドだという話でした。

ボランティアのおもな仕事は、電話対応、ドアノッキング、選挙登録のためのデータ集め、プラカード持ちです。電話対応は、民主党への選挙民からの質問に答えるというもの。ドアノッキングは、投票者の家を訪れて、選挙登録を促すと同時に、民主党サイドへの質問に答えるという仕事。データ集めは、近隣のサポーターが投票のための登録を済ませているかに関するデータ収集です。プラカード持ちは、下院の代議員ケーガン（民主党）と対抗馬ガード（共和党）のディベート前に公道でプラカードを持ちアピールするというもの。

私は、電話対応以外のボランティアをしました。英語のレベル的に難しいと考えたためです。もっとも興味深かったのは、投票者と直接話ができるドアノッキングです。私が投票者の家庭を訪問したのは、選挙前日と当日でした。寝起きの様子で「明日選挙なのか」となげやりに玄関に現れた若い男性。オバマがテロ組織と一緒にいたことがあるからオバマへの投票をためらっているという老人。オバマはソウシャリストではないかという男性。自分がかつて空軍にいたが、退役軍人への保障についての政策論争があまりないことに不満を抱え、決めかねている男性。彼らの多くは、オバマへの確固たる認識をすでに持っていて、それを変えるとか、説明してわかってもらうということができない状況ではなさそうでした。たとえば、テロ組織と一緒にいたという表現と、またその真偽について聞いても、私とパートナーが納得できる話を聞くことはできませんでした。また、ソウシャリストであると信じている人に、そうではないと思うとパートナーが彼女の意見を述べても、それは他人の見解だといわれるだけでした。

ドアノッキングを通じて学んだことは、学内で耳にすることのない 이슈で投票者がどちらに票を投じるか決めかねているということ。退役軍人への保障という 이슈はそのいい例です。私はそれについての知識がまったくありませんでした。そのため、ただただ投票者の話を聞いていることしかできませんでした。また、当然ながらすべての投票者は独自の認識を持っていて、それを変えるには、マクロ的にキャンペーンを行うだけでは変えられないということ。しかし変えるために払うコストが大きいため、キャンペーンの戦略としてはそこにあまり焦点を当てないでいること。多数派の意見のために、少数派の意見に目が配られないという民主主義システムのジレンマを実際に目にしているようでした。

選挙を終えて

選挙キャンペーンのボランティアから学ぶことは多くありました。とくにドアノッキングは、アメリカの投票者のことを知る絶好の機会でした。しかしボランティア全体を通して自分のかわり方を振り返ってみると、私は、ボランティア前に必要だと感じた努力を怠っていたといえます。客観的に政策を判断できるように、自分の視点をニュートラルに保つ努力です。自分の中では、両候補の政策について客観的に評価していたと思っていましたが、それをリパブリカンサポーターにぶつけていなかったで、実際はそれができていたかはわかりません。私は、多くのオバマサポーター群の外に出て、マケインサポーターと議論する機会を持つとうとしていませんでした。カレッジリパブリカンのメンバーにはミーティングであっていたので、話をしようと思えばできたにもかかわらず、学内のマジョリティは、オバマサポーターでした。そのマジョリティの一員という、いってみれば居心地のよい状況にとどまって外に出なかったことが一因だと思います。そこには、多くの仲間に関わりながら身を守る臆病さがあったといえるかもしれません。

学校での勉強の多くは、客観的な視点からの議論が求められるように思います。本を読むにしても、ディスカッションするにしても。それは、現実の世界における選挙戦への私の取り組みにとっても必要なものでした。しかし自分が実際に活動する中で、それは自分の臆病さに打ち負かされてしまったように思えます。ものごとを客観的に分析する視点は、マジョリティのなかにも、マイノリティの中にも保持されなければなりません。それができなかった自分の弱さが、変革すべき部分であるように思いました。



「ドア・ノッキング」で有権者宅を訪問



1年間の留学先で、地元の選挙運動に積極的に参加するという貴重な経験をとおり、宇野君が多くのものを学んでいます。

「自己変革」が、宇野君の留学の、そしてこの連載のテーマです。その言葉通り、体験を自分の中に取り込み、考え悩んでいます。異なる視点から自分の考えを見つめなおすことから「自己改革」は始まります。

それが、アメリカの教育の目的とされる「Critical Thinking」の態度です。宇野君は、アメリカの大学教育のエッセンスを学んでいます。

留学の期間もあと少し。宇野君、がんばってください。

この原稿、選挙の直後に受け取っていましたが、編集の都合で掲載時期が遅れてしまいました。宇野君・皆さんにお詫びします。